

平成25年度第2回県立長野図書館協議会協議議事録 概要

1 日 時 平成25年10月29日(火) 10:00～12:20

2 場 所 県立長野図書館第1会議室

3 出席者

<委員(五十音順)> 小林いせ子委員、田中春海委員、玉城司委員、塚田直樹委員、
平賀研也委員、若林恵実子委員

<長野県教育委員会事務局 文化財・生涯学習課> 下條生涯学習係長

<県立長野図書館> 松本館長、須田企画幹兼次長兼総務課長、池田副参事兼企画協力課長、
北原副参事兼資料情報課長、関専門幹兼資料係長、長田専門幹兼担当
係長、柳沢情報係長、町田主幹、内山主幹、北村主査、篠田主任

4 会議次第

(1) 開会

(2) 館長あいさつ

(3) 会議事項

ア 「県立長野図書館のあり方」の検討状況について

イ 県立長野図書館の事業について

(4) 閉会

5 会議の概要

(1) 館長あいさつ

皆様おはようございます。館長の松本でございます。本日は本年度2回目の図書館協議会ということで開催いたしましたところ、委員の皆様には大変お忙しい中全員の皆様ご出席いただきまして、本当に感謝に堪えない次第でございます。図書館関係のイベントですとか全国各地で様々なものが開催をされており、そういう意味でも皆様本当にお忙しい中ご出席をいただきまして、重ねて感謝申し上げます。

本日は前回第1回目の協議会に引き続き、今後の県立長野図書館のあり方について、ということを中心にご協議をお願いしたいと思っております。前回、概要ということでお示しをいたしまして、熱心にたくさんのご意見も頂戴し、更に具体的な内容として示してもらえればといったご意見もいただきました。当館が抱える様々な問題について様々な視点からご協議いただいて感謝に堪えません。本日はそれを踏まえまして、資料を整えたつもりでございます。この間に、当館職員との意見の交換もお取組みいただきまして、心から御礼を申し上げたいと思っております。

協議会でご意見をお聞きするのはこの検討の中ではこれで最後と考えております。本日のご協議を踏まえまして、内容を整理し県教育委員会の方へ提出したいと、それには合わせてこの協議会の協議の内容を提出したいと思っております。いずれにしても、長野県民の皆さんにとって、価値ある図書館意義ある図書館になるように私ども一步一步進んでまいりたいと考えております。本日も熱心なご議論をぜひお願い出来ればと思っております。本日はよろしくお願いたします。

(2) 「県立長野図書館のあり方」の検討状況について
事務局資料説明後、質疑応答および意見交換

<玉城会長>

あり方について、方向性、具体的事業について合わせてご説明いただきました。基本姿勢の中で指定管理制度導入のところまでいくつか問題があると思いますが、まずは基本姿勢に発信力があるか、これで良いのかというところから、どうでしょうか。この表現、サブタイトルも含めていかがでしょうか。

<田中委員>

県立図書館は他の市町村立図書館とは違うという意味で、この公共図書館の拠点というのは一番大事なことで、ここを押さえていかないとずれてしまうのではないかと思います。

<玉城会長>

ご説明の中では社会教育、生涯教育の拠点という言葉は何回か使われましたけれど、この文言の中には入れないということで良いでしょうか。

<須田次長>

社会教育施設として、という言葉に関しては基本姿勢には出しておりません。そこから派生した表現として、方向性の中で「生涯学習拠点」という言葉を書いています。

<平賀委員>

「県内公共図書館」とはどんな意味でしょう。その「拠点」とは何でしょうか。

<須田次長>

県民の学びを郷土に還元できるというシステムを創る役割を果たしていくために、県内公共図書館を支援していく、まとめていく、その中心的な役割を担っていく、そういう意味合いで使わせていただいております。

<平賀委員>

だとしたら、明確に県内の公共図書館の中核拠点を目指しますとか、指導的役割を果たしますという風に言った方が良いと思います。

<玉城会長>

前の形容詞が長すぎると分かりにくくなるので、文言を含めて少し修正してください。次のサブタイトルはよろしいですか。ぜひ進化して、県庁でもお芝居をすると聞きました

たが、閉鎖的なイメージでなく「開かれた場」ということをおっしゃっていただきたい。また文言を見直してください。

<平賀委員>

先ほどのメインタイトルは、やはりリードするんだ、県内の図書館よ付いてこいというニュアンスで、それは県民が知り学びそれを地域に還すということについての取組をリードするよという意気込みで。

<玉城会長>

それでは、方向性と具体的事業で、方向性Ⅰ、或いはⅡも含めて評価以前の問題として、いかがでしょうか。

<塚田委員>

方向性としてはいいと思いますが、基本姿勢は方向性Ⅰをかなり強くうたっていて、Ⅱの配分は何かうまく入れ込むことができるのか。やはり「県民の学びを地域・郷土に還元する」ことが大切だと思います。そのためにリーダーシップを発揮していきたいということだと思いますので、その辺を言っているのかなと考えています。

<田中委員>

「公共図書館とともに」とありますが、同じレベルでということでしょうか。市町村図書館が地域の課題解決のために頑張っている、そこを底上げするという考え方もあるのでは、と思います。

<玉城会長>

これはいかがでしょう。「ともに」、実際にやることは支援ということでしょうか。

<平賀委員>

「ともに」と言うしかない、底上げするほどの力が県立図書館にはないと思います。逆に言うと、一緒に議論することでお互いに変わっていこうということしかない。これは県立長野図書館が、というのではなく、今環境が変わっている中で違う所へ行こうと言うしかない、「ともに」でいいと思います。主要強化事業の1に支援とありますけれど。支援というよりは、「開かれた」というのと一緒に、県立図書館がどこへ向かって具体的に何をするか、市町村立図書館と一緒に何をするか、それも市町村立図書館とあるいは一般の市民やNPOとか社会的組織と一緒に検討しますと、その中で一緒に学びましょうというのが現実的なのではないかと思います。それぞれが中で考えていても仕方がない。支援というよりも、一緒に考える機会をつくっていきますということを、これは市町村立図書館からですが、ぜひお願いをしたいと思います。

昨日静岡県の図書館大会に行ったのですが、彼らは、例えばデジタル書籍とかデジタルアーカイブをどうするかという話を、県立図書館が市町村立図書館からメンバーを募って一緒に検討しているんですね。県立はこうやってください、市町村立図書館はこうやりますよ、ということをもみんなで議論して形にしていく。全く新しい世界へ行こうとしている訳ですから、そういう枠組みをご用意いただくということが、同時に市町村立図書館への

支援にもなるのではないかと思います。

デジタル化だけではなくて、例えばどういう資料を収集するのか、これはⅡの話にも関わります。地域史料・郷土資料にこだわるのは大切なことですが、いったいどういう風に資料を持ち合うのか、県立は何を持たなければいけないのか、これもこの図書館の中でだけ議論するのではなくて、広く市町村立図書館あるいは市民の方も含めて、そこに参画したいと思う人たちと一緒に議論して形にしていだけないかと思います。

それからリテラシーの話について、レファレンスについてもありますが、県民が図書館の仕組みや新しい情報を使えるようになるにはどうしたらいいのか、ということも実は一緒に考えて欲しい。今まで決まったレファレンス研修はあったのですが、これから県立も市町村も未知の世界に行くわけです。どういう情報をどういう方にどのように届けていくのか、情報リテラシーを上げるための情報をどういう風に提供していくかということも、一緒に考えましょうとして欲しいのです。支援の充実というよりは、みんなで一緒に考えさせてください、考えましょうと、出来るならそうしていただきたい。

<塚田委員>

今のお話の中で「県立図書館にそれだけの力があるか」ということだったのですが、私は逆にこの方向性の所で拠点を目指しますと、リーダーシップを発揮していきますと言っているので、それはぜひ目指していただきたいと思います。「ともに」と書いてあるのは、上から目線ではなくて皆さんと一緒にということなので好感が持てる表現だと思います。

<若林委員>

資料を読んで、はっきりしていてよく考えていただいたと思います。言葉の表記のニュアンスだと思いますが、「ともに」に「向上する」とか、一緒に考えながら目指す言葉を入れるともっと意欲的な印象になって、気持が伝わると思いました。基本姿勢も、進化・変化・開かれたという、改善したいという思いは一緒だと思うので、似た表現を並べるよりも「県立長野図書館は〇〇して進化します」といったように、どう進化するのか言葉を入れて一つにした方がいいと私は思います。

<小林委員>

私もサブタイトルについては、『進化』という表現は図書館として使うべきか、とても極端な印象を受けましたので、もう少し「開かれた」といった言葉に変えていただくのがいいのかなと思いました。「ともに」も「一緒に」といった柔らかな表現にした方が、同じ県民として目指していくにはいい意味合いで使われるのかなと感じます。もうひとつ、方向Ⅱの郷土資料の所で、「こだわり」という言葉がここに付くものなのか、と思ったのですが。

<須田次長>

今的小林委員さんの「こだわり」の部分ですが、表現が誤解を招くようであれば位置を直すなどさせていただきます。

<平賀委員>

主要強化石業の内容は、色々な方向性を持った項目と全く持たない項目、大きいことと

小さいことがごっちゃになっている感じがします。5の「創業・経営支援無料相談会」など、こんなに細かなことを書く必要はないのでは。そういう意味では、この太字の部分をどういう方向で出すか考えることが必要かなと思います。

例えば「開かれた」県立図書館の運営という意味では、1の市町村立図書館と一緒にということと、5のNPOと一緒にということは同じことなので、ひとつにして、開かれた運営・事業検討のプロセスを確立します、ということが大きな方向になるのではないのでしょうか。

それから2の遠隔地等未利用県民へのサービスは、単に輸送料負担の云々とか広報機能の話は非常に当たり前の小さなことです。これも収蔵資料を全ての県民に等しく届ける、ということが大きな、ふさわしい言葉なのかなと思います。

3のレファレンス機能の利用しやすい工夫と利活用も、実は小さな、業務に寄った言葉。要は資料に到達できるような、「しやすい」基盤を整えます、それが出来る人に皆さんになっていただきますということだと思います。だとすれば情報にアクセスできるリテラシーを皆さんに獲得していただくサポートをし、その方たちが活用しやすい環境を整えます、というのが大きな言葉で、そのためにレファレンスや色々な道具を整えとか、それを使うようにするプログラムをやるとかといったことが出てくるのだと思います。

4の子ども読書活動の推進も、どういう子ども読書活動を推進するのかということが本当はあるべきなのではないか、ただ読めばいいのか、という話です。

その後に細かなものが来る、レファレンスツールを整えるという言葉があったとすれば、ここに書かれている言葉に沿って企画されるもので、これは中項目です。さっきの1・2・3が大項目、エクセル表に書いてあるのが小項目ということかなと思います。

<玉城会長>

私も内部努力でできる問題と外部と連携してできる問題をきちんと分けていただきたい。そうしないとこんな風に羅列になって分かりにくくなる。つまり1と5は外部との連携、図書館或いは民間との連携、そして3と4はもしかしたら内部でやることではないでしょうか。それをやった上での開かれた図書館という風に見せていただいた方が、細かい項目は後で具体的事業の中で拝見すればいいので、分かりやすいと思います。

外部との連携では、どういう風に連携しようとしているのか、例えば子どもの読書推進も外部のどういう方と連携しあるいは開かれて公募して連携していくのか。主要事業全体を羅列式でなく、これは自分たちの自助努力で充分できます、しかしこれは外部との連携のうえで、として頂いた方が却って分かりやすい部分がでてくるのではないのでしょうか。今の5項目を、3項目に或いは2項目に整理していただいた方が、平賀委員のおっしゃったようなことも含めて、いかがでしょうか。

<若林委員>

これは、作成した時に対象を考えて項目をあげてあるのかなと思いました。市町村の図書館・民間団体のとの連携、そして4は子どもの事なので、人材バンクという外部との関

わりがあるけれども、分けて考えてここに項目として表記したのだと、意味合いを感じます。だとすると、この4の子ども読書は別枠でもいいと思います。人材バンクの作成はともいいことですので、連携の所に盛り込んでいただいてもいいと思います。

<平賀委員>

今話されているかなりの部分は表記の問題というよりは、本当にそうなるかどうか、例えば県立のデータベースの構築あるいは選書方針について、市町村図書館や民間活動と連携してみんなと考える場を作って、考えますということをするか、なさらないかということだと思います。ぜひそうして欲しい。ご議論いただいて、そうするのであれば、1と5を合わせて、市町村とも民間団体や一般の方とも一緒になって議論をして決めていくという開かれたプロセスを作りますというふうに言えばいいと思います。

それから2は、特別遠隔地ではなく、全ての県民が到達できる資料の持ち方をします、と本当に思われるかどうかです。単に図書館に無い本は届けばいいとか、送料を負担すればいいという話ではなくて。

3はレファレンスの問題ではなくて、みんなが使いやすい情報の見せ方をします、届け方をしますということと、みんながそれを使う能力を獲得するお手伝いをしますということ、本当に県立としてやるかです。今やっという事は言っていると思うんです。図書館の中でどう本を探すか、どうやって情報にたどり着くか、やっという事は訳ですからそう書くべきで、さらにみんながもっとそれを広く理解できるような工夫をしますよ、それから分かっている人にももっと簡単に情報にたどりつく手だてを考えますということだと思います。

それから4の子ども、これは「地域に還元できる学び」とどうつながるのか、例えば現実に人に働きかける子どもたちの力をつけるためにとか、そういう方向性がないとただ本を読め、という話なのか何なのか分からない。それによっては読書コンテンツ作りますとか、人材バンク作りますとか、全然違ってくると思います。例えば読書コンテンツでは、今東京学芸大学では子どもたちの学びのためのデジタルコンテンツをホームページでどんどん出しています。それはデジタルで学んで云々というある方向性を持って集められています。そうではない本のリスト、本屋大賞とか読み継がれてきた本とかいうリストを載せるのなら、そんなものは私はいらない、みんな持っていると思う。そのところをぜひ議論していただきたい。子どもたちにどういうリテラシーをどういう方向に向けてあげていく活動として、読書活動に携わりたいと思っているのか。

<塚田委員>

子どもについては恐らく生涯学習ということで、ここで学んだ子どもたちがやがて成長してその学びを地域に還元していく、ということかなと理解している。そういう意味では大切なことだと思うし、それならそういう一言を加えては。

<平賀委員>

そうですね、今年指導要領の変更で、地域に学ぶことを重点的にやるということが出て

きている訳ですから、子どもたちが地域に学ぶことを通じて、地域に関わることを知る・読書することを通じてと言うと、ここでそろえるべきものが変わってくるはずです。

<玉城会長>

今塚田委員さんもおっしゃったことを表記のうえでも入れ込んでいただいて、そうすると生涯学習、子どもから高齢者までという風になっていくのでつながりができる。せっかくいいことをやっているけど羅列式になってしまうとわからないということだと思います。

<田中委員>

長野県の県民に対してということだと思うので、この図書館に来る子どもというわけではなく、県内市町村の公共図書館の全てが子どもたちに向けてこういうことが出来ますよ、というものをある程度枠組みを決めて、みんなで取り組みませんかという旗揚げみたいなことを県立図書館でやってもらうのがいいのではないかと思います。各市町村立図書館などが読み聞かせなど色々なことがある程度のところに行けるように、県立図書館が援助して相談に応じるなりすることで、底上げするように動いてくれるといいと思います。

<平賀委員>

最初から、選択して集中しよう、切り捨てるわけではなくて、重点を置くところを選択しようと言っている訳です。「子ども読書」は今まで平板に底上げしてきた、今ここで、どこを重点に置くのか、みんなに理解してもらおうということだと思うのです。それに関しては、県内公共図書館が成程それをこれからやろうと思えるようなことを、この県立図書館のあり方と文科省のこれからの子どもの学びに関する方針を考えると、先ほどの、地域の環境や暮らしから学ぶというようなことに例えば県立図書館が重点を置いて子どもの読書活動をします、それ以外の事は今まで通り各図書館でやってください、ということかと。このことについてはサポートします、リストを作ります、これが出来る人のデータベースつくりますよ、というそれをどこに出来るか。私はこの流れで行くと、地域から学ぶということに重点を置くことが自然かなと。実際に担当されている専門職の司書の方がそれを必要と思われるかどうかぜひ議論していただきたいと思います。

<松本館長>

主要強化事業のところは並び方とか色々な範疇や次元の言葉が入ってしまっております。本来は方向とこの間にもうひとつ段階があって、具体的な事業もそこから示すようにすべきだったものを、中抜けの状態なので、並びも悪く、大きなものも小さなものもあって、失礼いたしました。もう一度検討させていただこうと思います。先ほどお話がありましたとおり、私どもの図書館の、はっきり言うと力の無さ、そういうものが背景にあるので全ての事が完全にできるか、中々欲張っても・・・というところが若干あります。それが悩みになって中途半端になっているところも確かにあります。

<玉城会長>

全ての事を、これだけのスタッフで全部解決しようというその意欲は分かるのですが、それがもしかしたらネックになっているのかもしれない。私達ができることはできると

おっしゃっていただいて結構なんです、実際にやってらっしゃるのですから。それと、これは「協働」で他の図書館や民間にも求めたいというのをきちんと分けていただければ、却ってすっきりするし分かりやすいと思います。しかし、全部の事業を自分たちでやると大変だと、後ろの事業を見ても思います。

<松本館長>

この中に入らないものもたくさんあり、またこれならできるというものも、これは本当にできるのかなというものも若干入っています。

<玉城会長>

ですので、「ともに」できることと、自分たちにしかできないこと、それはよくご存じだと思いますので、分けていただければ。

<松本館長>

正に「ともに」だという風に思っています。県と市町村の関係も対等なものですし、皆様ご案内のとおり市の図書館、町の図書館素晴らしい図書館たくさんありますので、それと張り合うようなことをやる必要は全く無いし、私どもがこうやれと言う、もちろん先ほどの姿勢としてのリーダーシップということは確かに感じていないといけないとは思いますが、そういう時代でもないと感じています。支援と言っても金銭面ですぐ出てくるような時代でもないで、「ともに」考えてその中でみんな決めて、さっきお話にありましたけれど、みんなでこういうことをやろうよと言って始めるようなことを出していないのかなと感じました。

<平賀委員>

そういう意味では、このエクセルシートの項目には別に誰も知らなくていいというものもたくさんある。夏休み図書館のパスファインダーなどはやればいいのであって、何も事業計画に書く必要はないと思うんですね。その中で本当にやらなければいけないことだけ、これをやりたいんです、一緒にやってください、私達はやりますということの中項目として拾えばいいし、その中項目の中でこれはこういう方向でやりたい、それをまとめて言うと大項目、こういう図書館を目指したいという話なのです。そのレベルでいいのではないかなと、これは各職員の業務分掌レベルまで入ってしまっている気がします。

<松本館長>

その辺りの整理をします。具体的なものをより出したいのでこんなかたちにはさせていただきますが、おっしゃられたように、事業につく形容詞などをもう少し工夫したり、細かなものから大きなものまであるのを整理させていただければと思います。

<平賀委員>

それは本当に言葉の問題ではなくて、どういう風にやるかという話です。本当に市町村立図書館や市民の方と協働して、自分達の事業の中身について議論するというのを皆さん受け入れられるのか、ということでありまして、子どもの読書ということについて、ある方向性を出すということをやしとするのかということでもあります。その辺はもう一度議

論をお願いしたい。

<松本館長>

形容詞と申し上げたのは、どうでもいいという意味ではなくて、今のお話のようなことが大事だと感じましたので、方向では例えば先ほどの子どもたちが地域に学ぶことといったことを出していくことを考えています。もうひとつ、サブタイトルを出し方がいいのかどうか議論もありました。今までの図書館のやってきた業務を、先ほど課題ということでお話しましたが、やはり考える時期であることは事実だと思いました。そこで私どもの決意表明といえますか、我々が新しいことに取り組んでいくんだと思っていることを、みなさんに感じていただくという意味で付けてみたのですが、また表現については検討したいと思います。

<塚田委員>

決意表明はいいと思います。表現はいじる必要があるかもしれないけれど、「有言実行」で。何らかのかたちで表現したいという気持ちはよく分かります。

<平賀委員>

やはり変わろうとしても、今の事を考えていくとこれもあれも大変だと、特に図書館の現場で色々な仕事を抱えているとそうなる。しかし未来から今を考え、「こうなろう」、だから今解決すべき問題がある、乗り越えられるなら乗り越えようとする。未来にどうしたいかということは今書かれることは、とても大事なことだと思います。それがどこを目指すか、どこに集中するかという話でないでしょうか。

<玉城会長>

その一つの方向性として、生涯学習とか信州に関する資料収集ということがあると思いますので、具体的なものが見えてくる方向性がないのではないかと思います。議論を方向のⅡへ移していこうと思います。

<平賀委員>

これは「こだわり」みたいな曖昧な言葉ではなくて「重点を置きます」明言されるべきだと思います。そのことで、資料の費用等についてはこぼさず、後については考えないということをお明らかにすべきだと思います。

<玉城会長>

そういう具体的な意見が出ましたが、その後についてはいかがでしょう。

<若林委員>

普通に使う言葉で、身近な言葉で表現されたほうがはっきりと分かります。「網羅的」という言葉は無くてもはっきりとして分かり、伝わるのではないかと思います。

<塚田委員>

この「こだわり」というのは、さきの決意表明のひとつだと思います。

<平賀委員>

ここに透けて見えるのは、各資料の担当者が「うちの事業も大事だ」「こちらも大事だ」

という議論があったのだろうな、結論として地域史料に関する「こだわり」という言葉に落ち着いたのだろうなと思いますけど。私は、それは各スタッフが決めることではなくて、県立図書館のマネジメントがこの資料に重点を置く、と言うべきことだと思うので、もっとはっきりと、ある意味予算はここに重点を置くんだ、後については残った部分で工夫せよというくらい意思を示すべきだと思います。

<玉城会長>

ご存じだと思いますけど、かつて信州は信濃教育会が懸命に郷土資料を集めていました。それぞれ、伊那には伊那郷土史会があり、そういったものが引き継がれたのは多分信州大学の信濃郷土資料叢書という本に引き継がれていったのか、私の誤解かもしれません。今それをやる機関が信州大学にもありませんし郷土研究会でも実はないのです。信濃教育会のそういった郷土資料を収集しよう、あるいはそれを整理して活字にしようとかデジタル化しようという動きは、私が感じているかぎりでは無いような気がします。それを、もしこの県立図書館が中核になってやるとしたら大変な事業だと思います。そういうことも含めて検討出来れば大きな意味を持つ、ただ内部の資料を動かすというだけでなく大きな事業になっていくし、信州教育のよい伝統を引き継ぐ機関が今実はないんです。それをここでやるとはっきりおっしゃれば、すごいことだなという風に思われるかもしれません。そこまではちょっと・・・ということですか。

<須田次長>

県立図書館として大事なものが、ここに書いてある長野県に関わる郷土資料を集めて、そしてこれからもそれを良い状態にして保存していく、そして利活用していく、それがこの一番大事な点だろうと思います。予算をそこだけに重点的に特化していくという考え方も議論したのですが、どうしてもこの図書館利用者をシャットアウトするわけにはいかない、そのジレンマがあります。ここで本を貸し出す、ここで本を読んでいく方がいる以上は、その方達にどういう風な本を見て読んでいただくかということもやはり考えていかなくてはいけない。どうしても予算を考えると特化できる部分のせめぎ合いが難しい。そこが、重点的という言葉を使い予算をそこに使っていくとなると、運営のやり方も見直さないといけない部分もありますので、今の段階だと厳しいと思っています。

<平賀委員>

今の段階で、とおっしゃるけれども、伊那市立図書館よりも富士見町図書館よりも貸出点数も利用者数も少ない図書館がなぜ網羅的に資料を集めて利用者を増やそうなんて思えるんですか。そんなことありえないでしょう。だったら重点を置いた資料で人にきてもらう。それは資料を借りに来るのではないのかもしれない、それを使った何かに来るのかもしれない、そのことを考えなければ意味がないですよ。いくらこのじり貧の状況で網羅的に資料を集めたって何でもあるけど何にもない図書館にしかならない。

<田中委員>

アンケートを見ると入館者の8割方が長野市内の方となれば、長野市に他に図書館があ

る以上あまり網羅的ということを考えなくていいのではないかと、その意見に賛成します。アンケートの取り方で、その資料を借りるためにきていますという数字がでていますが、その中身として郷土資料を知りたいがために来ていますという一項目を設けて見て、それが圧倒的に多いとなれば県立図書館では郷土資料をすごく集めて勉強できますよということになってくる。アンケートの取り方も変えてみて、色々なものでなく、何に特化していくか皆さんの利用を見てもいいと思います。

<平賀委員>

それは悩ましい問題で、実際にそれを使う人借りる人というのは本当に少ない。どこへいっても、全人口の2割が図書館を使う、その2割のうちの恐らく10%以下が郷土の資料というものを何かのために使うというのが今の状況です。それは借りると言ったり、いくら資料を増やしても増えるものではなくて、私は、それは利用者の数で測るものではないと思います。県立図書館は未来の人のために資料を集めなければいけない、とっておかなければいけない。しかも未来のために、今それに触れられる力のある人たちを増やす活動をしなければいけなし、それがいかに面白いかということ伝える努力もしなければいけないと思います。だから、今の利用者とか今の貸出冊数ということははっきり言って一切無視するべきだと思います。

<須田次長>

確認させていただきたいのですが、方向Ⅱの「網羅的な収集」は長野県・信州に関わる資料の網羅的な収集という意味合いです。一般の資料ということではありません。長野県・信州に関するものを、予算には限りがありますができるだけ多く、寄贈もかけて一生懸命集めますよ、という考え方を「網羅的な」とここに表しました。

<玉城会長>

ここは最初からの議論でしたけれども、つまり長野市立図書館があつて県立図書館があつて、両方で貸出件数を競つてもしょうがない、本来の役割は何なのかということから始まって来たと思います。それが今また初めに戻って、市立と貸出件数を競い合う発想に戻っているようにお見受けする。私達はそうではない、冊数で測っているのではないということをはっきりおっしゃっていいのではないかと、というのが委員さんの意見です。いかがでしょうか。

<須田次長>

今平賀委員さん、会長もおっしゃられたその内容は非常に心強く受け止めさせてもらっています。我々も利用者数をV字型に伸ばしていこう、そのためにどうしたらいいかと、それはそれで誘惑はあります。しかしそれをやるために本の性質は全て変えてしまうということは、やってはいけないことだと考えています。ただ郷土資料だけに全部特化してしまっているのかどうかに関しては、平賀委員さんが今おっしゃられたような意味合いにはまだ一步を踏み出せないという風には思っています。どうかたちで本を集めていくかについては、色々な本を借りる人がいるという部分もあるので、我々も小説という

ことではなくて他のジャンルの本を買い備えていこうという意味合いも持っていないとまずいのではないかという感覚もあります。長野県と信州だけに予算を積み増して、残った部分だけで他の資料を持っていくとなると、その調整にはやはりせめぎ合う部分があって悩ましい。できるだけ郷土資料を買っていこうと、寄贈も広くお願いして冊数をどんどん集めていきたいという思いはありますが、ジレンマが出てきております。

<塚田委員>

内容を細かくご説明なされたので色々でてきてしまったけれども、私はこの二行から読み取れるのは、長野県・信州の資料を充実していきますよということを行っていると思うので、「こだわり」どうのというのは言い回しだけのことで、方向性として問題はないと、むしろ県立図書館のひとつの使命ではないのかなと思っています。表現は、皆さんそれぞれあると思いますが。

<平賀委員>

「重点を置く」と言い切るかどうかは実は大きな問題で、そう言いきった瞬間に、それだけにしろと言っているのではないのですが、例えば社会というテーマでも3類の本を選ぶ時にその地域に関わる視点で社会の本を選ぶ、4類の自然科学の本の時は海洋の本ではなくて山岳の本を選ぶようになる、自然とそうなる。だから地域に重点を置くと言った瞬間に、郷土資料以外の部分の選書が変わる、変わらなければならないと思います。そういうことを起こすために、「重点を置く」と言い切るべきということがひとつ。もうひとつは、これから県立図書館に潤沢な予算が降ってくるとはあまり考えられない中で、デジタル化などでコストが上がっていきます。私は資料費を削ってでも今そこに投資すべきだと思っています。そうした時に地域史料は削らない、ほかの資料は削っていいと思えるかどうかです。そのためにここではっきりさせておくべきだと思います。

<松本館長>

非常に大事なお話だと思いますし、我々も内容統一が出来ていないところもあります。今年の基本方針の中にも、図書館の資料の収集の中でも特に郷土資料を収集するという言い方で来ております。今回「こだわり」という言葉を使ったのは先ほど塚田委員さんからお話ございましたけれど、新しいものをつくるにあたって、こちらの決意のようなものを出していこうとしたものです。また「重点」ということも、何%なのか、どんな言葉がいいのか、言葉の表現も含めてもう一度内部で考えさせていただきたい。基本的にはそういうことをやっていくということは変わらないと思います。ただ、先ほど会長さんからお話のあった資料保存センターの役割については、そこまでは考えていなかったことと、スペースの問題がありますので、それも含めて考えさせていただければと思います。

<平賀委員>

いわゆる第二線図書館論みたいな話をしているのでありません。来なくていい図書館という訳ではない。これは田中康夫知事時代、人の来ない公共施設は意味がないだろうと言ったことに対してみんな敏感に反応した訳ですが、皆さんがこの図書館を経営していくに

あたって、一応この協議委員という県民を代表している人が、「利用者数の増加を追わなくていい、しかし地域史料をきちんと中心にした図書館を作るように」と、今の図書館のマネジメントに対する後ろ盾を出そうとしている訳で、それを受け取っていただくかどうかという話です。選書に関しても先ほど申し上げましたが、出来るなら県内市町村の図書館職員と一緒に考える場所、委員会というものを作って、県立はこれを、長野市立はこれをやっていく、南信ではこのことをやるよ、ということを定期的に検討する、図書館職員が相互に向上できる場所であり、それぞれの方針が決まっていく場所を、ぜひお持ちいただきたいと思います。

<玉城会長>

それとの関連で主要事業をもう少し見て、図書館事業に関する評価と見直しへ入ってきたいのですがお願いします。

<平賀委員>

デジタルアーカイブの話で協働云々とありますが、今何をどう作るか決めるのも非常に難しい時期です。昨日の静岡でも一大テーマだったのですが、信州の場合特に「デジくら」で失敗しているという前例がありますので、同じような中央集権的なデジタルアーカイブを作っているのかどうかという問題があります。これも、連携協働とありますけれど、もっと広くみんなをつないで議論すべきだと思います。保存ということもありますが、やはり先ほどの地域に学び地域に還す人を育てる、活用ということ、デジタルアーカイブを作ったらそれを活用する、活用するために作るということをぜひ書くなりしていただきたいと思います。

<玉城会長>

これも、先ほど申し上げましたけれど NPO 法人を特定した表記をされてしまうと、ここにしか連携しないということになりかねません。それは避けていただきたい。広く応募した中で、他の NPO も認めるし参加してもらいたいという姿勢をとっていかないと、「開かれた」という言葉は全く嘘になりますので、そういう印象を県民に与えないで欲しいと思います。ここの表記の問題は大きな意味を持っていて、「〇〇との連携」というと他はシャットアウトするとなる。他の意見も取り入れていく中でこれもあっていい、という方向性を持っていかないと、今後県立図書館は県立に受けのいい NPO としか連携しないことになります。色々な機関と協議してそれぞれの良さを使うとした方が郷土資料も充実していくと思います。活用も、どこでもいいから活用してもらえような方向性を出してもらえればと思います。

では、評価と見直しの項目ですが、評価機関というのを作るのでしょうか。この図書館協議会が評価するというのでしょうか。

<須田次長>

そういうことです。一応年度の初めに目標を作り、年度の最後に実績をまとめ、次の年度の半ばに行われる図書館協議会に自己評価を出しまして、それに対してご意見を頂戴す

ると、そういう点検・評価をしていただくというように思っております。それをホームページに公表するというサイクルになろうかと思えます。

<田中委員>

図書館事業という言い方になっていますが、「県立図書館の事業」について評価・見直しをするとした方が分かりやすい、他の図書館と同じことを評価するのでは違うのではっきり書いた方がいいと思います。また他の公立図書館との関係も大事だと思いますので、市町村図書館がどう評価しているか、相談に乗ってもらえてよかったとかそういうことも載せていいのではないと思います。

<須田次長>

今の場合どういう風に評価いただくか考えると、アンケートのようなかたちになってしまうのかなと思いますが、検討させていただきたいと思います。

<平賀委員>

評価基準をどう持つかとか、評価項目の重点をどう置くかという話をだれが決めていくのか、それは内部で検討の場を持たれて、協議会でいいかどうかの議論があるのかなと思いますが、何の評価を大事にするか、どう決めていくかその辺も含めて評価の仕組みを考えていただければと思います。

<松本館長>

何を目標にしたらいいのか、まさに今日のあり方がそうのなかかもしれません。しかも数値化できるものと難しいもの、それから例をだしていただいた図書館をどう思っているかといった話も含めて、どういう課題に対してどういう目標を立てていくのがもちろん一番大事で、協議会にお諮りしないといけないですし、ホームページが全てではありませんが県民のみなさんの声、各図書館の声を聞けるような、そんなふうを検討したいと思えます。

<若林委員>

評価というのは難しいと思います。範囲が広いと、何のための評価が必要でどんな項目でやるか、またあまり間口を広げてしまうと後の集計も大変になってきます。今日のこの方向性で出している観点の評価で、どのように項目を書いたらいいか、具体的に検討してからが良いと思います。

<玉城会長>

これは、項目も含めて今の時点でかつちり方向性を出す必要性はないと思います。評価についてはもう少し検討してください。

最後に指定管理については現時点では導入は困難という結論について、いかがでしょうか。特にご異論が無ければ、この結論を委員会としても支持したいと思えますが。

<平賀委員>

この理由とされた不安について、何を持ってそう判断されたか分からないのでいいとも悪いとも言えないのが正直なところですが、同時にそれはどういう在り方を目指すかがは

つきりしてくると、継続性が保証されるのかということも、適切な業者がいるのかどうかも見えてくる、そういう意味では、あり方と重点を置いた事業をどう展開していくかという議論をまず詰めるまでは、ということであれば理解できます。自分達がやる事業が何であるかということをもう少しかっちり動かし始めたうえでないと、こういう不安があっ ていきなり指定管理を始めることはできないということかなと思います。

<塚田委員>

武雄市が大変評判になっていますが、これは市長が相当しっかりした考えを持って葛屋の社長に直訴したと話を聞いているので、そこまでしっかりしたものがあって指定管理者ということになってくる、まだ県立図書館の場合そういうしっかりしたものが、失礼な言い方ですが、指定管理者にこうだと言うものが無いとすれば、やはり現時点では任せるのはあきらめた方がいいと思います。今後、これから色々詰めていって、これは指定管理者にお願いしたいという状況が出てくればその時にそうすればいいということです。

<小林委員>

私も先ほど平賀さんがおっしゃたように、理由として書かれている不安について実際に適切な民間業者についてお調べになったのかどうか、全国で指定管理している図書館はたくさんあって上手くいっている所は上手くいっている訳ですから、ここでぱっと切っ ていいものかどうか不審に思ったのですが、これから方向性を決めてからと言う中で、お調べになってからそれを付け合わせて決められた方がいいと思います。

<須田次長>

どういう事業を県立図書館がきちんとしていかなければいけないかという部分、あり方がしっかりできていない中でこの運営形態をどうするかとなると、あやふやな状態だとい うのは第1回目の時にもこれからの検討課題だといたしました。

指定管理者についてもどういう事業をお願いしたらいいかということが明確にできれば、そこから検討させていただければと思っております。またその選定業者に関しても、都道府県立図書館の中では現在運営のところまでお願いしているのは1か所だけ、岩手県にTRC というところが入ってやっておりますが、その規模からするとうちの図書館とは比べ物にならないくらい大きな規模でやっており、果たしてこの図書館が同じようにできるのかということもありまして、不安かなと考えておりました。これからのあり方の中身、 どういうかたちで行っていくか、我々だけではなく民間の業者の方をお願いをしなければいけないことがあれば、そこでまた検討していくことが適当なのではないかと考えております。

<平賀委員>

今この図書館が変わらないのであれば、丸ごと指定管理に出せばいいと思っております、恐らく管理職の分だけで1億くらいコストが安くなります。でも「変わります」とおっしゃって頂いているから、今は待とうという意味での現時点です。

<玉城会長>

現状維持ということではなくて、変わることを前提としたもの、励ましの言葉だと思っていただきたいと思います。それでは具体的な事業の中で、たくさん項目がありますけれどこれだけはどうしてもというものがございませうか。

<須田次長>

これは、内部で検討する中でこういうことをこれから進めていこうということをお全部挙げてありますので、この図書館を変えていくためには小さなことでも取り組んでいこうという意欲の現れだと見ていただけたらと思います。

<北原課長>

個別の事業の中で、先ほどの委員さん方のご質問に一部答えて対応する部分がございますのでご説明したいと思います。1ページ(1)の4番目「市町村図書館への提言」の中で、県内公共機関と共に検討し提言していきたい、その内容的には電子書籍の対応とか郷土資料デジタル化とか活用といったことをやるために、先ほど平賀委員さんおっしゃいました県内図書館とともに考えるという方向で事業を考えております。また7ページの、先ほどのNPOの連携ともからむところですが、「郷土資料のデジタル化」という項目を上げた中で、図書館サポーターの活用として公募等により外部の人材の協力を求めていくことを考えていますので、NPOも特定するものではなくて公募等により色々な人に協力してもらってやっていきたいと考えているということです。

<玉城会長>

ありがとうございます。委員さんの方で特にご質問等なければ、その他の方へ移りたいと思います。事業についてご質問はいかがですか。では、子どもの読書推進活動のイメージ、これはとてもいいことだと思うのですが、長野市他の市町村立図書館と差異化していただいた方が分かりやすいかと思ひます。同じレベルでやろうとしているのでしょうか、それとも違うレベルの事をお考えなのでしょうか。県立はここが違う、というのは何なのでしょう。

<須田次長>

各市町村でこうしたこども読書推進ということをおやりになっているので、県内の状況を集め、窓口として色々な方にそれを利用してもらいたいということで、まず推進の方策の最初にあげたのが窓口の設定ということです。各市町村で、色々な活動をされている団体とか個人の方がそれぞれ自分達の活動を広げよう進めようという時の相談を相手として、我々の方に向けていただけたらという思ひでございませう。その辺りは各市町村の中でも色々情報交換をされていると思ひますが、県内全域に渡って集約して掲載していこうということです。他の市町村のことも分かりやすく提供していきたいと思ひます。

<小林委員>

私はこちらのお話のことを専門でやっておりますけれども、いいと思ひたのは、ブックスタートの実施状況調査、これはぜひやっていただきたい。特に各市町村で配布している本の内容、書名も全部網羅して情報公開していただけたらとても助かります。一つ一つ市

町村に当たらないと分からない情報を、全県的に網羅していただくと大変ありがたいです。今私達 PTA 親子読書推進の会でお手伝いをしているお話フェスティバルというのは市町村と違いがありませんので、その部分の特色を出していくこと、研修を新たに設定していただければということで、内容についてはまたご相談をさせていただいて、ということになると思います。

<須田次長>

これに関しては、中身をどのような形で充実させていくかは小林委員さんはじめ色々と活動されている方と検討しながらもっと肉付けをしていきたいと考えております。

<田中委員>

各図書館の中にボランティアなどで読み聞かせの会などがたくさん入っているとは聞いていますが、本当に色々な人たちがいるのだと思うので、そんなにしっかりやらなくてもという人もあれば、ものすごく勉強された方たちが入っている所もあると思います。そういう差が県内であるとすれば、ボランティアさんでもここまでできるようになって欲しいという援助をしていただければ、助かる図書館もあるのではないのでしょうか。その辺のところをある程度リードしていってもらえることがあるといいなと思います。

<小林委員>

中々研修にボランティアの方には出てきていただけない。これから図書館協会とタイアップしてやられると思いますけれど、ぜひそちらの方を広めていただきたい。毎年開催しているのですが出てくるボランティアさんはすごく少ない、自己満足でやっていらっしゃる方が多いと協会の先生から言われています。

<玉城会長>

他に何かありますか。

<小林委員>

今子ども読書の件でお話があったのですが、こどもから上の部分、中学生高校生の部分がちょっと抜けているのではないかと思います。私は今日中学校で芥川を読んできたのですが、その年齢のところが生涯学習の中からすっぽりと抜けているというのがとても心配です。そんなところも、県立図書館で配慮していただけたらと思います。

<玉城会長>

大変課題が多いのですが、それは仕方がないことですね。今日、だいぶ方針がしっかり見えてきたと思います。それをまとめていただいて、大変ですけどお願いします。では、その他に移りたいと思います。

(3) その他

県立長野図書館の事業について、事務局より平成24年度概要により説明。

利用実態及び満足度調査について、事務局より説明。

<玉城会長>

今貸し出し状況や利用者の満足度調査について伺いました。ご質問あるいはご意見をお願いいたします。

<田中委員>

この図書館利用についてのアンケートの中で、主な目的の調査相談が0という数字が出て、やはりここを何とかしたいとずっとお話されていたと思いますが、どうとらえていますか。

<池田課長>

今回の調査ではレファレンスの希望者、相談しようという目的できた方が無かったということになってしまいましたが、レファレンス、相談を受けてアドバイスをすること強化していきたいと考えておりますので、そのために図書館に来るという方を増やしていきたいと考えております。

<松本館長>

恐らく、最初から職員に相談するというよりは左の項目の調査、情報の検索の中から職員に聞いて頂いているのだと思います。始めから職員に相談するというのは、0人と言うのは意外だったのですが、そういうことかなと理解しています。

<小林委員>

今のところで、企画展を利用するためにも1人しかいらっしやらないのですが、企画展はすごく頑張って色々と企画をされているのに、ちょっとさみしいと思いますが。

<池田課長>

企画展に参加されるためにみえた方で時間の関係でアンケートに記入いただけなかった方が何名もいらっしやったという事情もあります。

<小林委員>

企画展はここに幾つもの項目を書いて頂いてありますが、企画展のところにアンケートを置いて、感想を聞くことも大事だと思います。

<池田課長>

企画展についてのアンケートも行っておりますが、中々書いてもらえない状況です。

<小林委員>

10月27日に、「(文字・) 活字文化の日」ということで読書週間が始まったのですが、読売の社説に「図書館には人々が交流する場としての機能もある」とあったのですが、この図書館としてはそういう部分をどんなふうに考えていらっしやるのでしょうか。企画展とかそういうことに焦点を置かれるのでしょうか。

<須田次長>

その読売新聞の対象は恐らく市町村立図書館がメインだと思います。今都道府県立で見渡しますと、ロビーを使ってコンサートをしたり、ボランティアさんに来ていただいて色々やっているということもあります。それを交流部門ということであれば、今この県立図

書館では実施していない部分です。子供向けのイベントを行ってはおりますが、やはりこの中で何か催しを行うことを出来るだけ考えていきたいと思っています。開かれた図書館という観点から見ますと、どのようなかたちで皆さんにおいでいただくか、というのはこれからの課題だと思います。

<玉城会長>

この図書館の方向性、「開かれた」「郷土資料」「生涯学習」、キーワードがいくつか出てきたと思います。それによって、またそのうえで民間への指定管理制度は導入しないということですので、しっかりした方向性の方針をもう一度確認していただいて、それに沿って事業内容も精査していただけたらいかと思います。では、以上で協議会を閉じさせていただきます。

<松本館長>

本当に熱心なご議論いただきまして、県立長野図書館に関わる本質的なご意見を今日は本当にたくさん頂戴したと思っております。私どもの整理が不十分なところもございましてご迷惑を懸けて恐縮でしたが、またこれを修正しながら、まとめていきたいと思っております。協議会での協議のスタイルは最後ですが、皆さんにご相談をしながらやっていかなければいけないと思っております。引き続きご協力をお願い申し上げます。本日は大変ありがとうございました。